

編者はしがき

本巻は、前巻から引き続いて『甘露の法雨』の講義であるが、八項目ある中の最後の項目である「人間」を扱っている。この「人間」は『甘露の法雨』全体の三分の一を占める『甘露の法雨』中、最も大きな割合を占める項目である。

この「人間」の項について谷口雅春先生は次のように述べておられる。

「この『人間』という項は『甘露の法雨』の中で最も長い項であるだけでなく、一番最後に書かれてはいますが、全体の中心を成し、締め括りを成す大変重要な項でありまして、つまりここには人間とは一体どういうものであるか、ということが書かれてある

I

のであります。では人間はどんなものかという人間は皆神の子である。この人間は神の子であるということが分ると、その解る程度に従って蹩の脚が立ち、中風が治り、胃病、神経衰弱がたちまち癒えるというような、いろいろの不可思議が出て来るのであります。しかしそうなることは、外から見ると不可思議だが別に何の不可思議もない。人間の真相は神の子でありますのに、その神の子が蹩や中風で脚が立たなかったり、胃病で苦しんだり、神経衰弱で心がモヤモヤしたりする方が余程不思議な話であります。本来神の子であって、既に円満完全な、無限の生きる力を持っているものが病気になどなるはずはないのに、その無いはずのない事が現れて来るのですからこの方が余程不思議と言い得るのであります」(二―三頁)

しかし、我々は、病気になることは「当然のこと」であり、常識であると思つてゐる。だからこそ、あれほど膨大なお金をつき込んで医療制度を作り上げているではないか、と思つている。しかし、谷口雅春先生はそれはまったくの「迷い」であると断言される。神の啓示が真反対の「真理」を語っているからである。

II

世間の常識は、死や病氣や災難や不幸は「ある」と信じている。しかし、神は啓示で「ない」と断言する。世間が「ない」とするものを、神は「ある」と断言する。この百八十度真反対の真理を、「天の使い」は『甘露の法雨』で一気呵成に歌い上げているのである。

谷口雅春先生は、この『甘露の法雨』の真理の解釈を誰にでも分かり易く、説いていられる。そして、「分かった！」と叫んだ人々の上に奇蹟が生まれ、分からない人々もその読誦によって、神界、霊界からの導きによって救われていったのである。

続いて谷口雅春先生は『天使の言葉』を講義される。この『天使の言葉』はもともと『甘露の法雨』の一部であった。だから冒頭の一句はそのことを明示し、『甘露の法雨』の続きとして神の言葉が語られていく。

「今日は聖經『天使の言葉』を話したいと思うのであります。これは聖經『甘露の法雨』の続きでありまして、『甘露の法雨』はあまり長いために、一遍に唱えるには長すぎるというので、一度切って、改めて別の『天使の言葉』という題の下に書かれたも

世間の常識は、死や病氣や災難や不幸は「ある」と信じている。しかし、神は啓示で「ない」と断言する。世間が「ない」とするものを、神は「ある」と断言する。この百八十度真反対の真理を、「天の使い」は『甘露の法雨』で一気呵成に歌い上げているのである。

谷口雅春先生は、この『甘露の法雨』の真理の解釈を誰にでも分かり易く、説いていられる。そして、「分かった！」と叫んだ人々の上に奇蹟が生まれ、分からない人々もその読誦によって、神界、霊界からの導きによって救われていったのである。

続いて谷口雅春先生は『天使の言葉』を講義される。この『天使の言葉』はもともと『甘露の法雨』の一部であった。だから冒頭の一句はそのことを明示し、『甘露の法雨』の続きとして神の言葉が語られていく。

「今日は聖經『天使の言葉』を話したいと思うのであります。これは聖經『甘露の法雨』の続きでありまして、『甘露の法雨』はあまり長いために、一遍に唱えるには長すぎるというので、一度切って、改めて別の『天使の言葉』という題の下に書かれたも

世間の常識は、死や病氣や災難や不幸は「ある」と信じている。しかし、神は啓示で「ない」と断言する。世間が「ない」とするものを、神は「ある」と断言する。この百八十度真反対の真理を、「天の使い」は『甘露の法雨』で「一氣呵成に歌い上げているのである。」

谷口雅春先生は、この『甘露の法雨』の真理の解釈を誰にでも分かり易く、説いていられる。そして、「分かった！」と叫んだ人々の上に奇蹟が生まれ、分からない人々もその読誦とくじゆによって、神界、靈界からの導きによって救われていったのである。

続いて谷口雅春先生は『天使の言葉』を講義される。この『天使の言葉』はもともと『甘露の法雨』の一部であった。だから冒頭の一句はそのことを明示し、『甘露の法雨』の続きとして神の言葉が語られていく。

「今日は聖經せいぎょう『天使の言葉』を話したいと思っております。これは聖經『甘露の法雨』の続きでありまして、『甘露の法雨』はあまり長いために、一遍いっぺんに唱えるには長すぎるというので、一度切って、改めて別の『天使の言葉』という題の下もとに書かれたも

界に投影する結果そうなるのであります。一切人の現いっさいじん実生活がそうになりました時、我らの地上生活は実相世界の影を完全に映出えいしゅつして、この世に地上天国が建設せられるのであります」（一九三〇―一九四頁）

「天の使い」が神の言葉を語る『甘露の法雨』『天使の言葉』は聖經と称せられている。そこに説かれた「真理の言葉」を我がものとし、より深く体得たいとくせられ、この実人生に幸福の花を咲かせ、成功の印を地上に印し、そして、すべての人々にこの尊い「真理」を宣のべ伝える使命を感じ得せられることを切に願って止まない。

平成三十一年三月吉日

谷口雅春著作編纂委員会